寛政甲寅考試書類三種——その三

戸出一郎[1]・町泉寿郎[2]

翻刻

（外題）寛政甲寅　考試　医案方付留記　多紀永寿院

（内題）考試出席御医師　医案方付留記并評議

墨書は考試之事ニ付候儀ニ而御座候。朱書は評判并に一体之主意ニ而御座候。

此度考試口問相済候後に病人之病状を相認メ差出し、為考試出席之御医師共、方付医案為仕、銘々方付医案之様子ニ而治術之様子相考へ候事ニ御座候。

但右病人之病証と申候は、於医学館被下候御薬を以て療治仕候、平日出席之御医師共医案方付ニ而全快仕候病人共之病証ニ而御座候。此病人此（1オ）」薬ニ而全快仕候へは、弥此医案之趣ニ相違無之候旨分明に相分リ有之候儀を以て、考試御医師共医案方付為仕候故、当否之訳是亦分明に相分リ申候。依之投剤之方組并方付之御医師、相談仕候世話役御医師姓名等迄審に朱書ニ而認メ加へ置キ申候。御参考御覧御座候様仕度奉存候。

一　九月十八日、廿日、廿二日之三日に考試仕候て、二十一人三分ニ御座候へ共、病人の病証、壱人を数人ニ而医案方付仕候者も有之候故、日割にて相認メ候へ共、同し病状数ヶ所に出し殊（1ウ）」之外繁（原「蘩」）冗に罷成候故、一病証之下へ医案方付一列に相認メ申候。仍而日割ニ拘リ不申候。

一　医案書法之儀ハ和文ニ而も漢文ニ而も勝手次第相認候様申聞置候事ニ付、書法相揃不申候。医案之儀ハ意義専用之事ニ御座候故、文章之佳悪は此書中ニは評論不仕候。

考試ニ付、医案方付書留并に評判

本道之部

（症例①）一　三十年前、赤飯を喫し食傷して腹痛強く、夫（2オ）」より今に積痛、脊の肺兪之辺より小腹へかけ疼、心下に碗程之塊あり。動気強く、上逆・耳鳴・目眩、食飲自可なれとも少々の物に傷候。二月十五日麦飯ニあたり嘔吐して積起リ、夫より寒熱出、且吐す。大便一両日は結し申候。小便清濁あり。頭痛致し左足微冷、積起リ候と手足厥冷す。去ル廿日に厠へ行テ気絶ス。去年蚘虫一条を吐す。脈、左右倶に沈細無力。

『右病人、医学館ニ而被下御薬を以て療治仕候。療治方左之通に御座候。

医案　此病人一体気化を失し、且症気ニ而諸気逆戻仕候（2ウ）」ニ付、中焦之気滞リ易く、遂に諸症を成し申候。

処方　直指方　集香湯加藿香・縮砂・烏薬

但此方は専ら利気之剤ニ而御座候。其上、磨積相兼申候。
気化相調候儀第一に仕候方ニ而御座候。右之医案方付之剤、
相用久服為仕全快仕候。
処方療治　関本伯典　　相談　吉田快庵』

考試ニ付右病人に医案方付為仕候。

一　久保元長

案　三十歳丈夫、傷食腹痛、脾胃衰也。此方主之。（3オ）」
方　加味平胃散　陳皮・蒼朮・厚朴・神麯・山楂子・麦芽・甘草
『此方全脾気調和之剤ニ而御座候。尤消導相兼申候。此医案ニは脾胃の気也と申候事ニ候。調和は薬を以て脾胃衰弱を補候と申候儀ハ有之間敷事ニ候。医案と方附と齟齬仕候。一件（体？）病人疝気より気化を失し候より発り候へは、何れニも聢と不仕方付ニ候。』

同証　（3ウ）」

一　内田玄勝

案　五蔵不調、因脾胃不和、所致奉存候。
方　局方　三和散
『医案方付共、大抵筋合相応ニ御座候。』

同証

一　上領玄碩

案　三拾年前、喰傷仕候者、疳積之症ト奉存候。
方　養胃湯　兼用奇応丸　（4オ）」
『此方附医案共聢と不仕候内、奇応丸斗リハ宜方ニ相見へ申候。疳積と申候儀も相聞不申候。十五歳以上は労と云、十五歳以下を疳と云と有申候。大人ニは不都合に候。』

同証

一　中川隆玄

案　一丈夫病患三十年、診之其脈沈細、而心下有塊如椀。疼痛則徹肺兪。吐蚘虫後期年、一夕卒倒而不省人事、雖蘇亦自若。是脾胃虚而蚘虫衝心故也。与安蚘理中湯可乎。
方　安蛔理中湯　（4ウ）」
『医案方附共、筋合甚相違仕候。疝気衝逆之症と蚘虫とハ遥に違申候。且吐蚘は一旦之標症ニ候。標本を弁ジ不申療治ニ而御座候。急成ル時は標をも治シ候事ニ候へ共、ケ様之証は緩病ニ候。必求其本と申候事、古来より之法ニ而御座候。』

同証

一　熊谷辨庵

案　此証、因中気不足、令然。
方　順気和中湯主之　古今医鑑
『中気不足ニ候は補脾之剤可然候。此方ハ中焦を調和（5オ）」いたし順気仕候剤ニ而候へは、医案と方付と齟齬仕候。』

同証　松井素庵

一　案　右者、因寒邪所侵、得之。此方主之。

方　三和散

『三和散は三焦の気を調和仕候剤ニ候間、先大抵相聞へ可申哉ニ候得共、因寒邪所侵得之申候医案ニは、一向に祛寒之薬無之候而引合不申候。』

同証　村岡玄超　（5ウ）」

一　案　一　男子三十年前、喫赤飯腹痛強、且積痛自肺兪至小腹、心下有塊大如椀、動気・上逆・耳鳴・目眩、食飲如故、而所傷速也。又吃麦吐、積痛寒熱。且吐、大便結一二日、小便清或濁、頭痛左足微冷。発痛則手足厥、至厠気絶。去年吐一蚘虫、脈沈細無力。右は因下虚上実候。蚘虫一篇之儀ニ御座候乎と奉存候。　方　烏梅丸

『僅一度蚘虫を吐し候ニ付、唯烏梅丸斗ニ而差置候は、是又行届不申候。且吐蚘ハ全一旦之標症ニ而御座候。一体主意穏当（6オ）」ならす候。』

（症例②）　一　四十二の男、六七年以来、冬毎に欬出、当年ハ七月節句頃より欬出て一度に欬血二合計り出、其後少しつゝ血の沫出、尤至て少々痰に交り出、温なる食物を食すれハ身温り直に欬出ツ。食後に別て強く出ツ。夜中も寝て温まれハ又直に欬出ツ。息切は絶す少しつゝ有之。脈浮数にして無力。腹は筋立たる方にて心下痞し、按之に少し痛む。二便食事大抵平常に異ならす。寒熱なく、舌は常のごとく少し渇あり。（6ウ）」

『右病人、医学館ニ而被下御薬を以て療治仕、全快仕候。仕方左の通リニ御座候。

医案　此証肺虚、津液不足、故ニ咳逆上気、火気上逆す。故ニ咳血あり。

処方　金匱　麦門冬湯加五味子・款冬花・桑白皮　右薬方相用全快仕候。

医案方付　関本伯典　相談　吉田快庵』

右病証に此度医案方付為仕候処、左之通御座候。

一　田中俊川　（7オ）」

案　此証心脾血虚、宜用皈脾湯加犀角・生地黄・麦門冬。

『此証は肺火に因り候而血分動き火気上逆仕候。其上逆気ニさそわれ血も亦上に妄行仕候。専ら大逆上気の気を治し可申事ニ候処、犀角・生地黄を加へ皈脾湯相用候は一向筋違とも難申候へ共、又的当とも難申候。』

同証　池田玄隆

一　案　此症血虚息切を不絶少々つゝ有之、脈浮数にして無力。宜茯苓補心湯。　（7ウ）」

『此方付も一向ニ筋違とも難申候へ共、意味合は相違ニ御座候。』

同証

一　木村簡元

麦門冬湯　金匱

『此方ハ十分的当ニ而御座候。』

（症例③）一　婦人年二十七、四年以前二月頃より脇腹へかけ痛、当年四月頃迄床の上に居る。欬出て横窠なりかたく、其後は時ニより作リ時により止み、咽の中に梅の核あるが（8オ）」ことく肩より脇へかけ痛ミ、錐（きり）にて刺ごとく腹へかけ引つり、気分悪き節は食事を給候てもすぐに飢候而食を欲し候。気分宜き節は平日之通に食す。小便自可、気分悪き節は頻数になり、頭痛する節は悪心もあり、一日之内度々気逆致し候。脈沈弦遅にして有微力。腹筋立、臍の左に塊ありて按之ハ痛む。尤塊の所に動気あり。

『右病婦、医学館被下御薬を以て療治仕、遂ニ全快仕候。仕方左之通リニ御座候。

医案　此婦人一体血虚中に瘀血有之、固腸胃虚怯ニ候（8ウ）」処、寒邪に被犯候而諸病を発し申候。仍血分を調候て寒邪を去り候ハヽ可然候。

処方　局方　調中湯加牛膝・延胡索・香附子　右薬剤相用全快仕候。

医案方付　吉田梅庵　相談　山本宗英』

右病証を考試に出席御医師ニ医案方附為仕候処、左之通リニ御座候。

一　田中俊川　（9オ）」

案　此属脾肺虚、兼痰積。　方　宜用加味四七湯。

『此方ハ利気開鬱之剤ニ而候。意味合相違仕候。乍去四七湯ハ気結の梅核気を主治仕候方剤ニ而候。此病女の証を梅核気と見候故、此方を付申候と相見申候。一向無理ニは無御座候。』

同証

一　池田玄隆

案　此症積気有、腹筋立動気有リ。（9ウ）」　方　大七気湯

『大七気湯は磨積相兼候、専ら利気之剤ニて御座候。此病婦ハ血分不調ニ而裡寒之証に属し申候。不相当に御座候。』

同証

一　木村簡元　（10オ）」

方　千金調経湯

『此方付も亦相応に御座候。』

（小児科）

（症例①）一　小児三歳、去春頃より何事もなく色相不宜、六月頃より左腿の附根腫起リ大さ桃の如く少々赤く色付たる

までにて散り申候へ共、しこりてあ（原「出」）り候処、正月頃より臍たゝれ内より紐の様成もの出、其後膿出、十五日頃より三月朔日頃迄小茶椀に一杯程ツヽ膿出て候。其内膿の如く成もの大便より一日に四五度宛二日計通し、其間に滑便三四度交リ通し申候。夫より又々右の脇下へ三寸四方程に腫起し、便膿も止リ外の腫も散リ、只今之容子は腿の附（10ウ）」根の腫大きく成、足伸かね、臍よりも少々ハ膿出、気分も重く飲食ハ不好、乳ハよく吮ひ、大便一日に四度やハらかに白き膿下リ通し、臭気有之候。小便白濁また臭気あり。蓐瘡（とこずれ）腰脊の間に三ツ腫起し、一体羸瘦し、鼻を弄シ血を出し、今に熱の往来あれとも最初の如き大熱なし。昼夜手足を按摩させ盗汗出る。乳を吮節も惣身に汗出る。脈中に得て浮数頗有力。『右病人被下御薬ニ而療治仕候。全快仕候。療治仕方、左之通ニ御座候。（11オ）」

医案　此小児一体遺毒ニ而不断腫物有之、膿汁出候事ニ御座候。久敷間ニ候故、気血虚脱仕、其上疳積相兼罷在候ニ付、書面之如き諸証をなし候事ニ而御座候。

処方　黄芪湯　此方は第一血気を補ひ候而体を取立、其次に疳積を治し候事を立意と仕候薬方ニ而御座候。尤胎毒之儀ハ膿汁出候事久鋪、毒気大抵膿汁より出候へ共、只今ニ而は血気衰候而疳積相兼候証ニ付、右方相用申候。右医案方附仕療治仕候而、久服為仕候処、全快仕候。

処方療治　朴庵倅　篠崎三伯（11ウ）」　相談　多紀安長』

右之病児之証脈、書面を以考試小児科御医師共ニ医案方付為仕候処、左之通リニ御座候。

一　吉田俊宅

案　三歳之小児、丹毒之症、右母在胎中、挾風熱生下、故胎熱入心脾、為此患乎。仍、方　犀角消毒飲、或黄連解毒湯『右俊宅医案、丹毒と申候は如何ニ候。丹毒之症ハ殊之外相違仕候。且処方も病発ニ候ハヽ先尤に可有御座哉。書（12オ）」面之趣、最早旧疾ニ而気血も虚脱仕、疳証を相兼候証に黄連解毒湯・消毒飲之類ハ是又不相当ニ御座候。』

同証

一　吉田栄全

案　小児三歳、何の故なく気分不宜、季夏に至リ左腿附根の辺腫起し大サ桃の如く、少し赤色を帯候迄ニ而腫散し、跡しこりに成候。此証胎毒と奉存候。又正月に至リ臍たゝれ、中も紐の様なる物大便より一日ニ四五度斗リ通し、其内に滑便三四度交リ通す。右之脇下へ三（12ウ）」寸四方程に腫起し便膿出て止、外の腫も散、只今の容子腿の附根の腫大きく成、足伸兼、臍よりも膿出、気分も重く飲食ハ不好、乳ハ能く吮ふ。応に津液枯竭するなり。大便一日に四度、やわらかに白き膿下リ臭気あり。小便白濁亦臭気あり。本胎毒を発し疳證と成リ、故蓐瘡羸瘦、鼻を弄し血を出し、今に熱往来、昼（原「益」）夜手足を案摩、盗汗出、乳を吮、惣身に汗出ル。津液枯燥、故に脈中に得て浮数頗有力也。

方　四物湯・四君子湯合方　加蟾蜍・青蒿
『右栄全医案は一体宜御座候。且方付之儀も方之名目（13オ）」薬品少々相違ニ候へ共、一体之主意は被下御薬ニ而全快仕候方剤に符合仕候。』

（症例②）　一　十三歳の男子、幼年より多病。七月頃より線のことき虫を出し、大便ニも時々交り出ツ。睡中にも不覚出る事あり。肛門を押しあけ見れハ、内に虫多くたまり有様に見ゆる。先達て遺尿したる節、右之療治したれとも今に至るまて治せす。蚘虫出る節は十四五条白き絹糸の如し。外にハ難儀なる事なし。食事は或進み或進ます、一体むらにてさほとにな（13ウ）」き事も有。灸は夥敷すへたれとも一向効験なし。脈沈小有微力。
『右病人被下御薬ニ而全快仕候。療治之儀、左之通リニ御座候。
医案　一体飲食過度、脾胃鬱積仕候故、虫を生し、惟今ニ而専ら虫之証ニは可有之奉存候。
処方　鷓鴣菜甘草湯　此薬方は専ら虫を殺し候。薬方、鷓鴣菜・大黄・甘草三味ニて御座候。右方剤緩服為仕候而全快仕候。（14オ）」

処剤療治　東宗朔　相談　多紀安長』

右病証、以書面医案方付為仕候処、左之通リニ御座候。
一　吉田俊宅
案　右者挾疳証、属虚寒乎奉存候。　方　附子理中湯
『医案ニは挾疳証と有之候得共、方ニは消疳之儀無之候。虫の沙汰も無御座候。医案方付共、一向相当不仕候。』（14ウ）」

同証
一　吉田栄全
案　十三歳之小児、医案難仕奉存候間、何卒御断奉願候。
『一体難治ニ無之候得共、若年之儀ニ付御断り申上候も尤ニ御座候。』

同証
一　木村元長
案　湿熱相搏生虫、当寸白虫也。
方　不換金正気散（15オ）」加海人草・大黄　正気散以湿除、海人草以下虫、後自不生。
『是ハ相当仕候。海人草は即鷓鴣菜之和名ニ而御座候。』

同証
一　村上良元
案　疳証故、右之虫下リ候事ト奉存候。
方　加味肥児丸
『是ハ一通リニ候。此主方ニ而治可申とも不被奉存候。』

同証
一　町谷元詮

案　此湿熱凝大腸、生虫也。
方　衛生宝鑑一方　鶴蝨・梹榔子・苦楝根・胡粉・白礬　兼用肥児丸
『是ハ一通駆虫之剤ニ而大抵相当仕候。』

（症例③）　一　小児九歳、外邪愈て後、無他症、陰嚢腫て如魚肥、透徹腫大にして歩行に障るなり。飲食大概如平（16オ）」日、二便如常、腹部軟、脈微数、気分何となく重き方なり。
『右病人被下御薬にて全快仕候。療治之儀、左之通ニ御座候。
医案　本草綱目使君子の条に依候て相考候へは蚘虫之証と被存候。仍而処方左之通ニ御座候。　理中安蚘湯加使君子大右薬剤相用、早速全快仕候。
医案処方　多紀安道　相談　山本宗英』（16ウ）」
右小児此度考試之節、御医師医案方付為仕候。
一　木村元長
案　膀胱風湿相鬱、聚水分。利於水道、則水胞自消。
方　五苓散
『右医案方付一通リニ而御座候。』

同証
一　村上良元
案　依風寒之儀と奉存候。　方　不換金正気散（17オ）」
『右医案方付不相応にて御座候。』

同証
一　町谷元銓
案　此少陰虚受風邪、気血搏結陰腫。或湿地久坐、風邪湿気傷、是陰嚢腫也。　方　五苓散加金鈴子
『此方付、主意は相違仕候へとも、疝気との見立ニ付、筋合相分申候。』（17ウ）」

外科之部

（症例①）　一　婦人年五十餘、稟賦虚弱、四五年前より左半身麻痺を覚へ、時々面部に浮気あり。当五月、左の耳後に瘡を発し、疼痛甚しく腫つよく、左の眼腫ふさかり、瘡の上に頭発のことく小瘡を発し膿をもち、一躰はれ甚硬く少し按し候とも殊之外痛強し。後潰破して腐肉指頭の如きもの三四塊出る。脈中に得て細数力有り。
『右病人は医学館ニ而被下御薬種を以て療治左之通（18オ）」御座候。
医案　耳後発軽症、積想在心、謀慮不快、火旺して鬱シ此症を発候。
処方　初托裏消毒飲　後十全大補湯
膏薬　初デキスデイビ　止痛化膿。後アポ、ストロールム・ハヂリコム合方　去瘀脱腐生肌。
右之薬にて内外兼治仕、全快仕候。

処方療治　野間玄琢　外治　丸山昌貞（18ウ）」
相談　山本宗英』

考試ニ付、右病人ニ医案方付為仕候。
村山玄格（ママ）

一　案　左半身麻痺は血に因リ申候哉と奉存候。耳後之腫物も瘀血上昇ニて発し申候哉と奉存候。
蒸薬　家方　主治瘀血消散。
膏薬　家方雙玉膏・真蛇膏　右合方主治、去瘀腐生新肉。（19オ）」
『右之症、瘀血とハ難申候。且瘀血上昇より発候とて、已ニ結腫膿をなし候に瘀血消散の蒸薬ハ相当不仕候。膿をなし候上は温薬にて化膿を助け、潰膿仕候へハ結聚仕候。毒ハ何の毒にても膿に化し出去リ申候。膿を成候うへ、消散の薬用候ハ逆治にて御座候。膏薬は先大抵に相聞候。』

同証

一　岡田東淵
案　結毒旧年在裏而所発也。膏薬温剤相用申候。
青竜膏　アボフス　玄々膏　バジリコム（19ウ）」
『結毒と申候は相当不仕候。結毒は黴瘡毒気、四肢百骸孔竅経絡に結し、又ハ関節の中に在て筋を損し骨を傷る等の症にて御座候。膏薬ハ至極相当仕、右病人已に此膏薬同様之方にて治申候。』

（症例②）　一　小児三歳、去春頃より何事もなく色相不宜、六月頃より左腿の附根腫起リ大さ桃の如し。少々赤く色付たるまてにて散シ、少ししこりになり居し処、正月頃より臍たゝれ内より紐の様成もの出、其後膿出、十五日頃より三月朔日頃迄、小茶碗に一杯程ツヽ出而、其内膿（20オ）」の如く成もの大便より一日に四五度ツヽ二日計通シ、其間に滑便三四度交リ通す。右之脇下へ三寸四方程に腫起し、便膿も止リ、外の腫も散、只今之容子は腿の附根の腫大きく成、足伸かね、臍よりハ少々ツヽ膿出、気分も重く、飲食は不好、乳はよく吮ふ。大便一日に四度やわらかに白き膿下リ臭気あり。小便白濁、又臭気あり。蓐瘡腰脊の間に三ツ腫起し、一躰羸瘦し、鼻を弄し血を出し、今に熱の往来あれとも最初の如き大熱なし。昼夜手足を按摩させ盗汗出る、乳を吮節も惣身に汗出る。脈中（20ウ）」中に得て浮数稍有力。
　但右は前条篠崎三伯、黄芪湯相用申候病児ニ付、病症前条書面と御引合御覧被成候様奉存候。
『右胎毒発出、瘡腫仕候と奉存候。腫候処膿可申様子ニ付、膏薬左之通リニ御座候。
膏薬　テヤキロン　引薬　四香散　右之外治ニ而全快仕候。
　処方　丸山昌貞　内治　前条方付有之候。　篠崎三伯（21オ）」　相談　多紀安長』
此度考試ニ付、右病人へ医案方付等為仕候。

一　村山元格

案　遺毒に因候哉と奉存候。難治之症にも可有御座奉存候。乍去内治専要に奉存候。只今之様子ニ而ハ臍に馬兜鈴、為末敷申候。上に蓋膏薬貼申候。腿之腫物、色初のことく少々赤く御座候ハ、　蒸薬　家方　主治消散。　腰脊之間三ツの腫起ハ蒸薬同断。

『遺毒に因候儀、勿論ニ候。尤内治専要之儀ニ御座候。但臍（21ウ）」に馬兜鈴末を摻候儀ハ如何ニ御座候。馬兜鈴ハ湿を乾シ候ものにて、糜爛仕候症に宜御座候。膿出候者には相当不仕候。蒸薬ハ家方ニ付評議難及候。』

同証

一　岡田東淵

右は難治ニ付、方付御断申候。

『此病児一体難治之証ニ候処、不思議ニ全快仕候故、東淵御断申上候も尤之事ニ御座候。』

（症例③）　一　五六年以前便毒を患、其後又便毒発し、愈後、去月三四日頃、陰茎疳瘡を発し、七月頃より今（22オ）」以て茎根に一ツ肛門の前に一ツ瘡を発し、膿水不絶少しつゝ出、飲食ニ便常のことし。脈沈。

『右は医学館ニ而被下御薬を以て療治仕、左之通ニ御座候。

医案　黴毒留滞、宜滲湿解毒。

処方　仙遺糧湯加大黄・天花粉・当帰・白芷・土地骨

外治　洗薬　消毒　黒効膏　去瘀腐　右薬方にて全快仕候。

内治処方　坂　三益（22ウ）」　外治　川嶋宗端

相談　吉田快庵』

考試ニ付右病人ニ医案方付為仕候。

一　曽谷玄梁

案　按に便毒之証、大抵厥陰肝経に属し候哉と奉存候。房慾をしいて行ひ、或は精気を忍てもらし候に根さし候。其後便毒を発し、茎根肛門の前に瘡を発し候は餘毒之深と奉存候。

処方　六物解毒湯　和方（23オ）」膏薬　家方　主治去腐肉

洗薬　同断

『処方膏薬洗薬共に相当之事と奉存候。』

同証

一　増山養甫

是先年の便毒治方都て行届す、黴毒深き故の所為歟。飲食如常、両便常のことく全く一通りの黴毒而已と奉存候。（23ウ）」

方　下毒剤　膏薬　冷

『下毒は解毒之誤と奉存候。処方膏薬、先大抵ニ御座候。』

（症例④）　一　男子去暮、右の眉上ニ小瘡を発し荏苒今に至。三月十五日魚肉を食し、翌日に至リ眼胞へかけて腫、ものを見る事能ハす。頭痛増寒、飲食常のことく、大小便自可、眼

中赤みなし。脈浮。

『右病人は、医学館ニ而被下御薬を以て療治仕、左之通ニ御座候。

医案　癤に候へ共、稍疔に似候て毒気も一通ならず奉（24オ）」存候。

処方　初清上防風湯　後疔毒復生湯

外治　膏薬温剤　口膏薬　バヂリコム　右薬方にて全快仕候。

内外相兼処方　関本伯典　相談　吉田快庵』

考試ニ付、右病人江医案方付為仕候。

一　曽谷玄梁　（24ウ）」

案　湿熱より起候と奉存候。夫故魚肉の湿物を食し候て暴に此症に変し候哉。内経所謂、膏粱変足リて大疔を生し候と申に当リ候哉と奉存候。

処方　敗毒散　膏薬　家方　吸膿

『処方膏薬共尤ニ奉存候。内経を引き候は相当とも難申候。』

同証

一　増山養甫　（25オ）」

案　湿瘡風毒のなす所歟。和解之剤可然。腫物は三稜針にて悪血を出し、寒剤之膏薬可然奉存候。

『医案も聢と無之、且温剤之膏薬にて全快仕候症にて候処、寒剤之手当如何奉存候。』（25ウ）」

口科之部

（症例①）　一　当春より前歯一枚痛段々相増、上下不残痛、斷黒色に成、針を刺て膿血出ス。痛は止み膿血ハ今に不断出、頭痛強し。飲食如常、小便一日に二三行、大便は瀉す方なり。食物少し多く食する時は噫気出ルなり。脈緩有力。

『右病人、医学館ニ而被下御薬を以療治仕、全快仕候。左之如くに御座候。

医案　胃中瘀熱上升に因り候。仍而方付左之通リに候。（26オ）」

処方　甘露飲　口中療治　含薬　家方生地黄湯　并貼薬家方　右療治仕方ニ而全快仕候。

内薬　片山宗琢　口科外治　堀本好益

相談　吉田快庵』

右口中病人之証、此度考試出席御医師医案方附為仕候趣、左之通リニ御座候。（26ウ）」

一　本康寿仙

案　胃熱強故也。依之此病発也。

方　家方散薬　黄連・五倍子・甘草・芍薬・紫檀・升麻・忍冬・黄芩・蒲黄

『右附薬相応に相見申候。』

同証

一　本康碩寿　（27オ）」

案　脾胃虚弱之故也。
方　加味四物湯　擦薬　当帰・生地黄・礬石・麝香、右為末歯齦へ擦也。
『右医案脾胃虚弱とハ雲泥の相違ニ御座候。方付ハ可然哉ニ御座候。』

（症例②）　一　男子年近四十、形痩色青白。平素嗜酒、いつとなく舌下腫、漸々満于口、不知痛痒。酒を多（27ウ）」く飲する時は微疼す。飲食二便自可、小便時々微黄色。心下頗痞、按之痛、臍上有動気、腹すべて軟。脈左右俱弦数有力。
『右医学館ニ而被下御薬を以療治仕候而全快仕候趣、左之通リニ御座候。
医案　痰飲上逆、舌下に凝聚仕候より発申候。仍而処方左之通リ候。
処方　半夏瀉心湯　外治傅薬　柳花散　針を患所ニ刺し痰出て治。右療治ニ而全快仕候。（28オ）」
処方　山本楊庵　外療　堀本好益
相談　吉田快庵』

右病証、此度考試出席之御医師ニ医案方付為仕候処、左之通リニ御座候。
一　本康寿仙
案　脾蔵（原「歳」）之虚スルニ因也。
方　家方散薬　天瓜粉・石膏・硼砂（28ウ）」竜脳・辰砂

『右脾蔵之虚と申候ハ如何ニ御座候。散薬は可然候。乍去、此附薬斗りにてハ治可申様は無之候。』

同証
一　本康碩寿
案　血虚之故也。
方　清金導赤散　黄連・山梔子・木通・甘草・香附子・当帰・山薬・川芎　（29オ）」
『右血虚と申候ハ如何御座候。右に準し方付も聢と不仕候。』（29ウ）」

※本稿は文部科学省科学研究費助成・特定領域研究A(2)「江戸のモノづくり」研究の一環である。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）[1]
（二松学舎大学・北里研究所医史学研究部）[2]